

十二日間のイスラエル聖地巡礼の旅に出掛けた。二千年前のイエスの足跡をたどった。多々ある記念聖堂や建物にとらわれることなく、そのようなものが何もなかったイエスの時代に思いをはせた。土地も水も、空も、草花も、空を飛ぶ鳥たちも二千年の間つながって生きてきた。人もまた、

「あれから」二千年を生き続けてきたのだ▼日常の生活の場を離れてイスラエルに來ると、二千年前に生きていたわけでは

ないのに、まるで、自分が「あの」世界に生きていっているように感じる。使徒たちを通して伝えられた「み言葉」を読み、今、

地の塩

リヤラ滞在中に感じたことであつた▼巡礼者は旅の途中でイエスに会い、一緒に旅を続ける。それはエルサレムへの旅。エルサレムはイエスが十字架に付けられて殺され、復活し、救いのみ業を完成された所である。それから、弟子たちが再びガリラヤに戻つたように巡礼者も自分の生活の場に戻らなければならない。私の生活の場が、私のガリラヤなのである▼帰りの飛行機の中で免税品の販売に群がる旅行者を見

る。ブランド品に身を固め、ブランド品を求める人たちを眺めながら、巡礼の旅が夢のように思えてきた。弟子たちにとつてもイエスと共に生きたことは、夢のように思えたのかもしれない。しかし、夢は現実となつていつまでも続く。イエスは復活して今も生きておられる。そして、そのイエスと出会う場はガリラヤ、わたしの今の生活の場なのである。